
王女さまの箱庭

アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王女さまの箱庭

【Nコード】

N7992V

【作者名】

アキ

【あらすじ】

王女さまの箱庭の話。

サスペンスっぱいけれど、サスペンスほど怖くはないかな、と思います。

少しファンタジー入ってますね。

ここは箱庭。

とある王国にある、王女さまの箱庭。

王女さまは美しく、聡明だと有名だった。

しかしいつからか、王女さまは国民に姿を見せなくなった。

箱庭には色々なものが置いてある。

初恋の人にもらった薔薇が乾燥したものや、昔気に入っていたドレス。飼っていた犬の死体までもが、地面に埋まっていたりする。誰も箱庭に近づかない。

箱庭には、王女さましか入ることを許されていない。

王さまでさえ、箱庭に入ることはできない。

箱庭は当初、王女さまのために作られた庭園だった。色鮮やかな花に囲まれた、この世のものでないかのような美しい庭園。一日中庭師が手入れをしていた。

王女さまは庭師に懐いていた。

庭師は王女さまに薔薇を送った。

王女さまが誰かに懐くことはとても珍しかった。

両親や、婚約者とも折り合いの悪かった王女さま。彼女は自分以外の全ての生物を嫌悪しているかのようにだった。

けれどいつの日か、庭師はいなくなった。

王女さまはその頃から、機嫌が良くなっていた。

王女さまの部屋は、箱庭とつながっている。王城の最奥に作られた王女さまの部屋には誰も入ることができない。王様でさえも。

王女さまはとても美しく、可憐で、そして物静かだという。

今より昔のいつかの日から、王女さまが国民の前に姿を現したことはない。

王女さまは今、とある侍女に懐いていた。

侍女は王女さまと同じくらいの年代の娘だった。新人で、間違えて王女さまの部屋に入ってしまった時に気に入られたという。

侍女は王女さまと四六時中共に過ごしていた。

朝から晩まで王女さまと過ごす侍女に、王妃さまが言った。

「休みが必要ではないですか？」

侍女には恋人がいた。

三日後、デートをする約束があった。侍女がそれを王妃さまに言うのと、王妃さまは三日後に休みをくれた。

侍女はそのことを王女さまに報告した。

翌日、侍女が消えた。

侍女が消えたことは、王様の命令によって国民に広がることはなかった。

けれど、侍女の恋人にだけはそのことを隠し切れなかった。

侍女の恋人は、侍女が消えたことを知った。

侍女の恋人は、知人にそのことを相談した。

知人は王城に勤める従僕だった。

従僕はそれとなく王女さまのことを調べ、消えた庭師のことを知った。そして、王女さまの箱庭のことを知った。

従僕は皆の目を盗んで、王女さまの部屋に忍び込んだ。

王女さまの部屋からは異臭がした。

ものが焦げるような、はたまたすりつぶした薬草のような。

従僕は何かを踏んだ。

なにか焦げたものだった。

部屋の奥にかガラスの扉があって、その奥が庭園らしかった。

従僕が庭園に入ると、そこには若い青年がいた。

従僕に背を向け、咲き誇る薔薇の手入れをしているらしかった。

彼が、あの消えた庭師だろうか。従僕は青年の肩に手を置いた。ゆっくりと庭師は振り向いた。

「あなたは、王女さまに仕えていた庭師ですか」

庭師は振り向いたまま、「お逃げなさい」と言った。

そしてそのまま、まるで従僕がいなかったかのように前へ向き直った。

ガサリと音がして、従僕は振り返った。そこには知人の恋人である侍女が立っていた。

侍女と従僕もまた、知人だった。

「ここにいたのですか」

従僕は侍女に近づいた。

侍女は従僕に見向きもせず、部屋の掃除を行った。

「誰」

知らない少女の声がした。

従僕は振り返った。

そこには、黒いドレスを着た少女が立っていた。美しい顔立ちだった。

「王女さまですか？」

従僕の言葉に、少女はふわりと笑って頷いた。

「あなたは誰？」

「僕は……といいます。彼女を探しに来た者です」

従僕の視線をたどり、侍女を見た王女さまは頷いた。

「そうですか」

彼女の返してください。

従僕がそう言うと、王女さまは困ったように眉を寄せた。その姿もまた、可憐で美しかった。

「それは困ります」

「では、」

王女さまはニコリと笑った。

侍女の恋人は、従僕からの知らせを待った。
待って待って待ち続けて、そしてそのまま死んでしまった。

従僕は、時たま城下に現れた。

現れるたびに、奇妙な薬草や生き物を買ったり、はたまた食料品を買ったりしていたらしい。

王女さまの箱庭には、誰も入ることを許されていない。

従僕が普段よりも無口になってからは、王女さまは一度も部屋から出ることがなくなった。

それでも庭園の花は咲き誇り、部屋は片付き、餓死で王女さまが死ぬことはない。

それは何故？

だって、王女さまには優秀な下僕が存在したから。

花を輝かし、部屋を片付け料理をし、必要なものを外の世界から調達してくれる下僕達が。

王女さまの箱庭。

つまり、王女さまは聡明だった、というお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7992v/>

王女さまの箱庭

2011年10月9日13時15分発行